

新崎盛暉が語る

## 地域と共に生きる大学



聞き手 新村

洋史

亀谷 和史

片山 信之

伊藤 彰男

——今、いろんな形で大学が問われています。重要な問題として、大学が立地している地域、あるいは地域住民の方との関係の中で、ハード面もソフト面も含めて、大学がどういう役割を果たすべきかということを考えていく必要があるんじゃないだろうか。今回、私どもは、「地域・住民と大学の協働」という特集を企画し、是非、新崎先生が学長をなさっている沖縄大学の様子を伺いながら、地域と大学との関係あるいは住民との関係ということを考えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

私の沖縄問題へのこだわり

——早速ですが、先生は、東京でお生まれになられて、大学生を送られて、研究者としてご活躍をなさっているわけですが、先生と沖縄の関わりから伺いたいと思います。新崎 私は両親は沖縄出身なのですが、私自身が生まれたのは東京で、一九三六年生まれです。国民学校の三年生の時に敗戦ということになります。私は一九五二年に都立小山台高校に入りました。五二年というのは、対日平和条約、日米安保条約が効力を発効する年です。四月二十八日に校長が全校の教職員、生徒を校庭に集めて、今日で日本はめでたく独立をしましたという。そして、万歳を三唱することになるのです。

それまでは、ぼくは、沖繩出身であるということと日本人であるということに何の矛盾も感じてなかったのです。ところが、沖繩の出身者としての立場から言うと、対日平和条約第三条で沖繩が半永久的に日本から切り離されることになり、アメリカの軍政下に置かれることになるということとは高校生であってもわかっているわけでしょう。当時の方が今よりは高校生の政治意識は高かったと思いますけれども、そういう中で、万歳を三唱するような人たちと沖繩人である自分との関係をどうとらえたらいいのかというのが衝撃的であったのです。ある意味では、これがぼくと沖繩との出会いといってもいいです。私はそういう形で、まず高校の時に沖繩とぶつかる。

その夏に、朝日グラフが初めて原爆被爆者特集をやった。それまではプレスコードがあって、原爆被害者の実態はほとんど報道されていなかった。ぼくたちは、子どものころは軍国主義教育でしたから、敗戦になったら、鬼畜米兵を教えていた先生たちがぐるりとひっくり返って、アメリカ民主主義礼賛になるといって、そういう中で、ある意味での教師不信というものをずっと持ちつづけています。どちらかというところ、ぼくなんかは右翼少年的なものをずっと引きずってきたと思います。そういうぼくたちにとって、沖

繩を切り離して万歳とはなにごとだという反発のしかた、非常に右翼的な心情もあったと思います。ぼくは高校で弁論部に入って、六月に弁論大会があるのですが、その垂れ幕のぼくの演題は「日本の真の独立への道」。その写真が今でも残っています。沖繩が切り離されても、何も感じない校長以下教員生徒全体への弾効でもあったのです。

ところで、当時のぼくたちの中で戦争というのは、戦闘員と戦闘員との戦争というふうイメージされてきたのだと思う。これは後から考えてのことなんですけれど。ぼくが東京にいる時、空襲があつて、近くの池に赤ん坊の死体が浮いているのを見たこともあるし、疎開先で機銃掃射を受けたこともあつて、戦争を全く知らないというわけではなかったのです。非戦闘員も巻き込まれるというのを知らないわけではないのですけれど、それほどぼくの中に強烈なイメージを与えてなかったのだと思いますね。それで、逆に非戦闘員の戦争とか、被爆者の特集というのは非常に大きな衝撃を受けました。

その秋に、偶然なんですけれど、仲宗根政善さん、この前お亡くなりになりましたけれど、ひめゆり学徒隊の引率教員で、戦時中までは女子師範学校の教員で、戦後は琉球大学の教員をされた国語学の研究者です。彼が『沖繩の悲



あさき・もりてる ●1936年、東京都生まれ ●沖繩大学学長。東京都庁に勤務した後、沖繩資料センターで活動。沖繩返還後、沖繩に移住、研究・評論活動と同時に、実践的な平和運動にも加わる。

劇 ひめゆりの搭をめぐる人々の手記』という本をまとめて五一年に出したのです。ぼくが本屋の店頭で目にしたのは五二年の秋。これに被爆者特集を上回るような衝撃を受けた。ぼくが高校一年の時ですから、ひめゆり部隊として動員された人たちというのは、今の中学三年から高校二年の、あるいは師範学校だと高三くらいの、まさにわれわれの同世代だったのです。そういういわば非戦闘員の戦争。それがまた、すぐ今井正によって映画化されます。そういう中でぼくの思想的立場ががらっと変わっていった、いつの間にか沖繩を背負って自分は生きるという意識を持つようになる。沖繩のことを誰も知らない。それをきちんと解

明して、皆に認識させることが自分の仕事だと思い始めます。

そのころ、ぼくのクラス担任は復員兵だったので、彼は、野間宏の『真空地帯』は事実だけれども、ひめゆり部隊というのはフィクションだと話したのです。そういう時代と環境の中で、ぼくの自己形成がなされているわけですから、沖繩がテーマにならざるをえないのですね、ぼくにとつて。きちんと沖繩戦から現代に至る歴史的過程を認識したい。ぼくは沖繩で戦争がなくて、沖繩が米軍支配下におかれることもなければ、おそらく沖繩出身者という特別な意識を全く持たずに、普通の東京人として生きていったらうし、沖繩のことを考えることもおそらくなかったらうという気がします。

### 私の大学時代と 沖繩資料センターとの出会い

新崎 とにかく、そういう出会いがあったから大学に行っても、ぼくは研究者になるということを考えたことがなかった。沖繩問題をどうするかということですから、例えば一番考えたのはジャーナリストです。しかし、大学で勉強している中で、やはり沖繩の問題というのは基本的には沖

縄から発信しなければいけないと思うようになって、卒業したら縄で仕事をしようと思ったのです。大学であれ新聞社であれ。それで、父の小学校や中学校での友人たちとのつながりを頼って、大学を出たら縄でということ、就職運動ということではないけれども仕事を探すと、非常に歓迎されるのですね。縄というのは人材不足で、当時の縄は軍政下に置かれていますから、多くの若者たちはどうやって縄を逃げ出すかということだったのですね。そういう時代だったのですけれど、話は全部間際になっておじちゃんになるわけです。おじちゃんになった理由は、薄々は感じていたけれども説明はされなかった。それが政治的な問題であるということは、だんだん理解できるようになってきたけれども。

たまたまその頃、一九五〇年代の中頃、ぼくが大学に入った頃なんです、縄で鳥ぐるみ闘争というのが起こって、縄問題がクローズアップされてきたのです。ところが、縄に関する具体的な資料というのはどこにもない。それで政治スローガンのアピールばかりしていてもしょうがないではないかと考えた中野好夫さんが縄資料センターをつくった。中野先生も縄に直接つながりがあったわけではなくて、中野先生と三高の野球部の同期生が最後の

沖縄県知事の島田叡氏なのです。先生は『最後の沖縄県知事』という本を書いたのがきっかけで縄の問題に踏み込んだのだと思います。そういうことで沖縄資料センターをつくった。

それは、ほとんど中野さんが自分のポケットマネーでつくったものなんです。中野先生が中心となって、自由人権協会の海野普吉さん、『世界』の編集長吉野源三郎さん、後に東大総長となる加藤一郎さん、それに上原専祿さんの五人が世話人。中野さんが呼びかけて、自由人権協会の片隅にテーブルを一つとアルバイトの職員一人を置いて沖縄資料センターを立ち上げたのです。

私は社会学の日高六郎先生のゼミ生なんですけれど、うちにこういう学生がいるという話になって、日高さんの紹介でぼくは中野さんの仕事を手伝うことになった。ただし君に給料を払うのは難しいなあということ、ぼくは東京都庁に勤めながら沖縄資料センターのいろんな企画、ニュースを出すとかそういうことをぼくが全部引き受けることになったのです。資料センターに関する中野先生のエッセイは、『中野好夫集』にも入っていますけれども。

そういう中で、『世界』に沖縄の状況を紹介したり、いろんな勉強をさせてもらいながら一九六五年に岩波新書に

中野好夫さんと一緒に『沖繩問題二十年』を書いたりしていたんです。ある意味では、二足のわらじ、三足のわらじを履きわけながら、やっつけていくわけですけど、それで復帰ということになったわけですね。

### 復帰前後の沖繩の大学

——復帰前後の沖繩の大学の様子はどのようだったのでしょうか。

**新崎** 復帰することになって、いわゆる沖繩の大学で、日本の大学設置基準を満たしている大学というのは一つもなかった。当時、琉球政府立だった琉球大学も含めてそうだった。それで、琉球大学は日本政府が国立にして、金も入って面倒を見るということになった。その時、沖繩に私立の大学は二つあったのです。先にできているのが沖繩大学。これが那覇にできているのです。それなりに沖繩の経済状況が変化したり、本土よりはるかに低かったですけど、大学進学率がどんどん高くなっているのです。琉球大学だけでは対応できない。

当時はまずアメリカへの留学制度と、文部省が国費学生という別枠を作って試験をして、全国の国立大学に通わせるというエリート養成コースがあった。その次に琉球大学

があって、そして、大学進学率に対応する形で沖繩大学ができるという形だったのです。しかし、進学熱というのは非常に強かったもので、例えば大学経営などというのは、大学設置基準があるがなかるうがとにかくみんな大学に集まるという雰囲気だったのです。

それで、今度は沖繩中部に国際大学というのができたのです。こっちは私立大学の二番手だったということもあって、はじめから経営難というのがあったみたいですね。それで復帰の時に、日本政府が出した案が、琉球大学は国立大学として吸収する。あと、沖繩大学と国際大学は、この狭い沖繩には四年制の私立大学が二つでは成り立たないだろう。これは統合して一つになりなさい。そうすれば日本政府が十億円の補助金や何億円かの特別融資を出す、ということになったのです。それで、国際大学はそれに飛びついたわけです。沖繩大学もしぶしぶお上には逆らえないというわけで、理事長が了承するのですね。

### 沖繩大学存続闘争と私

**新崎** ところが、その頃は、いわゆる大学闘争の時代でしたから、学生たちから猛反発をくって、結局は教授会が真っ二つに分裂して、事務職労組とか学生自治会と一体とな

って、沖縄大学存続闘争というのをやるのです。私立大学というのは、そもそも設立の理念が違っているのに、一方的に一つにするのはおかしいじゃないかと。これはそれなりに説得力を持ったのです。確かにおかしいということは間違いないですからね。経営上、私立は二ついらぬから金を出してやるといっただそれだけで一緒にするのはかといふことで、存続闘争が起こって、それでいろいろの不当性を訴えて歩くのです。文部省を訴えるとか。文部省の前に座り込むとか。そこまで沖縄大学の残留派はやる。七二年が復帰ですから、七一年末頃そういう方針が打ち出されていたのです。

それでも、七二年の四月までは新しく学生が入ってきました。その学生が卒業した段階で、旧沖縄大学と国際大学は廃校になる。それで新しく沖縄国際大学というのをつくるべきであるということだったのです。それが不当ということ、いわゆる存続闘争をやっていくわけです。その時にはぼくはまだ東京にいるわけで、あまり大学の問題に関心がなかった。当時は大学否定の雰囲気とかそういうものがあつたから、大学の一つや二つ潰れたつていいんじゃないかという感じだったので。

たまたま由井晶子さんという沖縄タイムスの記者に、「あ

なたたち、大学が勝手に潰れるのはいいけれど、文部省がつぶすというのを黙って見ているの？」とけしかけられて、東京で沖縄大学の存続闘争を支援する「沖縄大学存続闘争を支援する会」というのをつくつたのです。その時に、大学側が働きかけていた人たちには、京都大学の井上清さん、明治大学の宮崎茂樹さん、立正大の星野安三郎さん、法政大の永井憲一さん、などがいた。永井さんなどはものすごく熱心だったので。中心メンバーは永井さんとぼくみただった。とにかく中野さんはうーんとかいつてのつてこなかったのですけれど、そういう五、六人の大学関係者が中心になって、大学関係じゃなかったのは、ぼくと沖縄の歴史学者、比嘉春潮さんです。そういう人たちが存続闘争を支援することになった。

——そのとき先生は、都庁にまだいらつしやつたのですか。



新崎 都庁と沖縄資料センターの二股をかけていました。もう一つこういうことがあったのです。身銭をきってつくっている沖縄資料センターを、復帰したら、沖縄県とか、そういう公的なところがやるべきではないかというのが中野さんの主張だったのです。それでどこか引き取り手はないかということをやったら、手を挙げたのが法政大学だったのです。法政大学は、その時中村哲総長で、そこに外間守善さんという沖縄の言語研究者がおられて、彼が中村哲さんと組んで資料センターを引き取りたいと。こうして資料センターは、法政大学の沖縄文化研究所の基礎になったのです。そうしたことが並行して進んでいました。

いろいろすったもんだあったのですけれど、結局、沖縄大学の存続派と文部省との間に、へんてこりんな妥協が成立するのです。妥協というのは何かというと、文部省も困っていたと思いますが、省令か何かを出して統合のための政策を押し進めているわけです。こっちにはそれに同調しないで頑張っているのがある。現実的に存在しているわけです。文部省もお前のところは大学じゃないとはいえないのです。七二年に入学した学生が卒業するまでは大学だと言っているわけですから。いきなり学生ごと統合ということとはできませんから、文部省も頭を抱え、日本の大学の設

置基準に合わせて、復帰後に新たに大学設置認可申請をすれば、認可するということになったのです。だから認可申請を出せという話になったのです。

### 私と沖縄大学の関わり

——先生の沖縄大学との関わりをお話し下さいませんか。  
新崎 それまでは、沖縄大学があるということを知ってはいたけれど、メンバーとの付き合いがあったわけではない。沖縄の大学といえば琉球大学がほとんど代表していました。琉球大学はアメリカがつくったのだけれど、結局唯一の大学として発足していました。仲宗根政善さんもそうですし、その頃の若手の政治学者、経済学者みなそこから出ていますから、そういう人たちとは結構付き合いがあったり、情報交換があったのですが、沖縄大学というのは当時、知らなかったですね。

それが今話しましたように、大学存続闘争を支援することから、関わりをもつことになるのですね。

沖縄大学はそれまでは三学部くらいあったのですけれど、それを法経学部一つと、短期大学部にまとめて、それでも教員が足りないのですね。教員の頭数をいろいろ揃えて、文部省に認可申請をした。その時に、行き掛かり上、

認可申請の書類に名前を連ねる教員として、ほくもいくつか著作がありましたから、とりあえずはその中に入ったわけです。沖縄大学側が本土からかき集めた教員の中にほくもなんかが入っていた。

七四年の二月一日に、沖縄大学が文部省にある意味で再認可されるということになった。それで、前の大学を認めないのですね。文部省監修の『全国大学一覽』の中で沖縄大学を見ると、七四年の二月一日に設置認可と書いているが、その上に、六一年二月十七日琉球政府の学校教育法による設置と付記されている。つまり、継続性を認めている。しかしその時でも、いろいろ条件付なんです。例えば、図書館棟を建てなければいけない。その当時は、古ぼけた小さな三つの校舎だけが大学だったのです。学生たちは、自嘲的にマッチ箱三つの大学といていた。宇井純さんに言わせれば、便所が一つしかない大学。マッチ箱の外に便所が一つあった。そういう状況だったのです。

ところが、文部省には設置認可されたものの、すぐには社会的に認知されないのです。その大きな理由は、どういう大学であるべきかということを出しきれなかったことにあると思う。もともと、何で一つにするのということに対する反発は、同情や理解を得たけれども、文部省に

にらまれている変な大学で、この前まで赤旗が翻っていた。片方は十億円のおかげでプレハブだったのがだんだん整備されて大きな校舎を建ててくるということになると、高校の進路指導はどういうふうになるか。

今度は内部的な理念闘争になるのです。結局、なんだかんだといったって、大学というのは、施設設備が大切なんです、この狭く苦しい所ではたばたしているからいけないんだ、この土地は売っぱらっちゃって郊外に土地を買って移転して「大学らしい大学」を作るべきだ。もう一方、ここで、沖縄大学が沖縄社会に存在していることの意味を、地域社会に問い掛けることから出発しないとそもそも大学は成立しないと主張する側とに分解していくわけです。

最初は施設重視派が、執行部を握っているのですが、学生が集まらないわけですから、結局、教員に給与も支払えないということ、移転の問題をやるうとして土地の手付をうったけれども、こっちは売れないという破綻状態に陥った。ものすごい状態になって理事会も成立しないという状態になった。

そういう中で、みんな投げ出しちゃったのです。投げ出しちゃったのをしようがなくて拾ったのがわれわれということになる。ほくも、こんな大学、存続闘争も一生懸命や



ったけれど、意味ないじゃないかというところまで来ていた。けれども、存続闘争を社会に訴えた責任は今度はこちらに生じてくる。結局、日本経済史の著名な研究者でもある安良城盛昭さんが、おれが学長も理事長もやると言いついて、こっちは潰れるなら早く潰して撤退と思ってる時に、えらい目にあうと思うけれど、しょうがなくてとにかくやるうということになった。まず安良城学長が、ものすごいエネルギーを使って、前の執行部の尻拭いみたいな、土地の手付を取り返すというようなことを、蛮勇を奮ってやったんです。しかし、そういうことに疲れたり、いろんなこともあって、二年経たずして大阪府立大学に移っちゃったのです。その後を引き継いだのがわたしたちです。

### 沖繩大学の試み

——先生が学生時代を通じて、あるいは研究者になられてからでもそうですが、日本のいわゆる大学というものをどういうふうに感じておられたのか。いろんな問題もあるかと思うのですが、沖繩大学がさまざまな先駆的な取り組みをなさっている、そのあたりを中心にうかがいたいと思います。具体的に言いますと、土曜教養講座を早い段階からおやりになつています。それから、学生の面から言えば、単

位互換を早い段階からお始めになっている。さらに、沖繩の地理的な状況から島の移動大学。そういう非常に特徴のある活動をなさっている。どういうお考えからこの取り組みをやられているんだろうか。地域と大学の関係あるいはその地域住民の方と大学の関係について、是非、先生の率直なお考えをうかがわせていただきたいのですが。

新崎 給与も払えない、理事会も成立しないというような状況の中で、自主管理という言葉だけが生きている時代背景の中で、どういう大学をつくるかという試行錯誤の中で、さきほどこいろいろ評価していただいている土曜教養講座とか、移動市民大学とか、単位互換制度とかそういうのを打ち出したのです。

そのことで、何年かの間にいくらか社会的評価が定着し始めました。当時はちょうど十八歳人口が増えてきた時でしたが、増えてきた時代でも沖繩大学では減っていたんですけれど、とにかく増える方の波に乗ることができるのです。沖繩大学の建学の精神みたいなものとしては、「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる開かれた大学」というのがありますけれど、それは一九八〇年頃にわれわれが打ち出したスローガンです。それを裏付ける個別的な政策として土曜教養講座があり、移動市民大学があり、単

位互換制度があり、入試制度の改革があり、カリキュラムの全面的見直しがありということになっていくのです。

### 派遣学生制度から単位互換制度へ

新崎 初めは若干の抵抗勢力もあったし、特に土曜教養講座や移動市民大学というのは、学生募集にも役立たないのに、何で学生じゃない人間を対象にして金を使うのかというところもありましたけれども、それがやはり社会的評価を高めたとわれわれは思っています。単位互換制度でも、初めは単位互換じゃなかったのです。派遣学生制度から始まりました。文部省は大学設置基準で他の大学で三十単位まで取得することを認めるといつていたにもかかわらず当時、学部レベルでそういうことをしていたところはなかったのです。そのころまでの沖縄大学の学生はほとんど沖縄出身の学生です。さっき言ったように、米軍政時代はエリート層が米留とかこちらの国立大学を出ていたのです。沖縄返還後は、そういう制度はなくなります。なくなる代わりに、塾・予備校が沖縄でも雨後の竹の子のようにできてきて、とりあえずは東大とかそういうところに入る人間も出てきているわけです。琉球大学は国立大学になり、沖縄の私大に来る学生というのは、離島僻地、受験情報が比較

的少ないところとか、経済的にも上層ではない部分。だから、学費も安かった。当時、これも宇井さんの言葉ですけども、国立大学より学費の安い私立大学は見たことがないといわれるような状況だったのです、ともかく、沖縄大学、あるいは沖縄の私立大学の学生は沖縄しか知らないわけです。これでは沖縄のよさも悪さも相対化できないわけです。だから、経済的な事情その他が許せば、小学校から大学までのうち、大学くらいは本土の大学に行った方がいいのです。沖縄の大学を経営していながら、そういうことを公然といつていたのですが、それを沖縄の大学にしながらやるのはどうすればいいのか。文部省が単位を他で取得できるといふのを、生かそうじゃないか。それで派遣学生制度といふのをやろうということになった。

初めは個人的つてをたどって、例えば、当時学長だった安良城さんの知り合いが立命館の教授にいたので、立命館でやりましょうかということになった。そうしたらどっと十何人かの学生が希望した。そんなに引き受けられないというので慌てて、当時副学長だった哲学の永野善治さんが上智大学の出身だったから、上智へお願いに行つて、立命館に入れられないものは、上智で引き受けてくださいよということになった。ぼくは、たまたま法政大学の常務理事

で政治学の増島宏さんと面識があったので、それとことと彼のところに行つて、法政大でも引き受けてくれないかという。そういう派遣学生制度から始まるのです。

ですから、今でいえば、科目等履修生ですけれど、当時は聴講生ですよね。学生が授業料をうちに払う。そして、この学生が、むこうで何単位か取得する。その受講料はわれわれが払う。向こうの大学はうちよりも授業料が高いから、聴講料がうちの学費を上回るということもあったのですからね。初めはそこまで予測してなかったのだけれど、学費だけをとつてもそれほど落差があったのです。

そういう派遣学生制度から始まって、いろいろ枠を広げていくのですけれど、四番目は和光大学。和光というのは、たまたま、今、学長をやっている三橋修さんというのが大学の同級生だったのです。それで、君のそこやらない？という話になって教授会に出したら、すごい議論になった。どんな議論をやっているかというところ、東京大学と提携するのならわかるけれど、なぜ沖縄大学なんかと提携しなければいけないんだ、こういう議論を教授会でやっているという内部情報が戻ってくるような、そういう時代だったのです。

ところが八五年でしたか、津田塾大学の江口朴郎さん(国

際関係研究所の初代の所長)から手紙が来て、お宅の大学は面白いことをやっているが、うちも提携しないかということだったのです。それでぼくは大感激して飛んでいきました。江口さんを動かしてそういう試みをしようとしたのは小国論の百瀬宏さん、朝鮮問題の高崎宗司さんや林哲さんなどです。この人たちが沖縄はいわば日本の中の第三世界じゃないか、地域研究の一つのテーマとして、沖縄のことを勉強させたらどうだという話になったらしい。互換というのはそこから始まるのです。

#### 単位互換制度の魅力

新崎 うちでこの制度を作つて今年で何年になりますでしょうか。うちから送り出している学生は、二百四十名くらいになりますし、外から受け入れている学生は七十名くらいになります。一番初めに来たのは、津田から二人来た学生。それで、何年間かは津田だけじゃなかったかな。初めに津田の学生が沖大に来たころは大変だったと言います。何でわざわざ沖縄に来るんだと、周りの学生や教員から珍しがられて。ぼくの知っている範囲でも、その後三人が、卒業後沖縄に舞い戻ってきて、結婚したり、就職したりしている。その後、和光も互換になって、これ以降は互換協

定を結んだ大学は六つになります。

最初の三つの大学は沖縄大学とは規模も違いますし、そもそもが個人的なついでが始まっていますが、その後は相互交換協定というかたちになっています。今一番、相互関係が密接なのは津田と和光と京都精華、そして一番新しいのは岐阜経済大学です。

ぼくは、沖大に来た学生には言っているんだけど、大学で単位を取るか授業を受けるよりは、この沖縄中がフィールドなんだから、一年間生活している間に沖縄から何が学べるかが君たちが来た意義だろうと。結局七十人の学生をこの間で受け入れましたが、今年是一年間で十二名です。外に出ているのは六人しかいないのだけれども、これから来ているのは十二名ということになっています。これはこれで、非常に大学を活性化させますね。特にゼミなんかをやる時に。違う大学にいた異質の学生が混在していることはそれだけでも刺激になる。そして、毎年学生がきているような大学では、去年沖縄大学に来た学生が、翌年、うちから行っている学生の面倒を見てくれる。下宿の斡旋とか。津田なんかは寮を提供してくれているのですけれど。ともかく、いろいろな慣れない一年間の生活に、何となく相談相手になってくれる。逆も成り立つ。大学を通さない学

生同士のネットワークまでできてくる。

### 大学の存在意義に関わって

——ちょっと前に戻るかもしれないんですが、再認可の件ですね。いわば理念闘争に入っていったというふうにおっしゃられたのですが、どういう大学であるべきか、つまり存在している意味を問い直そう。この中で、もちろん一挙にみんなそれを考えてやってご覧というふうには、なかなか意思統一できないですね。その辺のところ、もう少しお聞かせいただければと思うのですが。内部でいろんな意見が飛び交う、けれどもそれらが結果として——一九八〇年ごろですか。先ほど先生が言われたように、「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる開かれた大学」という理念、そこに結実するわけですよ。そのあたり同じ教員間でも激しい議論があつたと思うのですが、いかがですか。

**新崎** 実際は、あまり議論はしていないのです。あいつらみたいな理念だけ言っても食えないんだというのが現実派ですから、金持っているやつはどこかにいないのだろうかとか、そういうのを理事にできないだろうかとか、そういうレベルで動くのです。そうすると、政治家のひも付きとかね。そういうのが理事になって金出そうかとか。そうい

う人たちにとつては、小さな大学でも手に入れることはそれなりに意味があるらしい。

議論をして、その中から一つの方向性が得られてきたとは必ずしも言えないのです。つまり、要するに現実派が権力を握るといっておかしいけれど、執行部を握っていて、につきもさつきもいかなくなってきて放り出すわけですね。そして、次の学長選挙をどうするかという時にも、投げ出したいにも関わらず、ダミーみたいなものを出してくるとかね。こちらはさつき言ったように、安良城盛昭があれがやつてもいいよと言ったので、教授会で学長選挙をやる。そうすると、賛否全く同数。三回も四回もやり直しているうちに、白票が一票安良城の方に動いた。そしたら安良城がなったという状況です。

初めから土曜教養講座をやるべきだとか、単位互換をやるべきだといった政策をもっていたわけでもないのです。大学はキャンパスの美しさとか、施設設備ではない。もつと社会に存在意義のあるようなことをやらないと、学生は集まらないのだということしか言っていなかったのです。しかし、そういう形で一票差で転がり込んだ。では直ちに何かやらなければいけないわけです。それで次々と出てくるのが単位互換であり、土曜教養講座である。もつとも土曜

教養講座は、われわれが自主的グループとしてやっていたことはあるのですよ。こういうことをやるべきだというテーストケースとして。しかし、それが組織的には位置づけられていなかった。さつきも言いましたけれど、こんなのは学生増にとつて役に立たない、もつと高校を回ってなんかやるとかね。しかし、やる材料がないですね。校舎は一番貧弱だし、何を一体宣伝するんだと。

逆に、大学の教員の中には、とりあえず沖繩社会の問題について、何らかの角度から話ができる人間もいるし、あるいは集中講義に誰か呼んだら、必ずその人を教養講座の講師にするとかね。そうでなくても、網を張っていれば沖繩に調査に来る人間なんかすぐわかるわけだから、すぐとつ捕まえて講師にする。沖繩大学で手薄な自然科学系統の講座もすぐできる。そういう形で組みあがっていくのです。

——まともな大学人だったら、だいたいそういうふうに見えるし、地域とか学生にとつてメリットのあるようなもの、自分の生き方とか、将来が開けるような勉強を大学で用意するといふふうに変えてきたけれども、今は全然そうではなくて、建物とか、見かけとかね、文部省が言っているような単位互換とか、メディアとか、それで大学が良くなるように思っているけれども、先生がやられてきたことは全

然違いますよね。その現実派というのでなくて、地域派というのか、そういうのがヒットしていくのですよね、社会的に評価されて。沖縄大学の存在感が出てくる。内容的にも、沖縄の住民の人でも評価する、外の人でも評価してやってくる。そういうふうな発展というのは、ある意味ではオーソドックスなだけども、今の時代には全然合わない。ほくちもそういうふうになれほしいなと思ってます。そうすると教員の方からすると、大学人の歩み方というのは、もつと自信が持てるのですけどね。沖縄大学の場合、新崎先生の場合は、ちゃんと評価がついてくるから。

**新崎** 沖縄社会は、小さな社会でもあり、それなりにいろんな矛盾を持っているだけに、逆にいえばそういう理念的なものも評価する土壌が若干はあるかもしれないと思いませんがね。ただ、だから、ある意味で土曜教養講座のように効果を上げると皆、真似していくわけです。今、どこでもやっていますよね。リカレント何とかと。単位互換だって、今や沖縄の大学だと全部やっているんじゃないかな。そういうことになってきたら、今度は何をするか考えなくちゃいけないですよ。

### 私が考えるこれからの大学の姿

——今、沖縄大学で学んでいる学生に対しては、四年一貫のゼミ活動を打ち立てられるのですね。四年一貫というのをやっておられるわけですけれど、大学全体がそういうカラーでできていますね。

いろいろな取り組みをやられていると同時に、沖縄に存在している大学として、沖縄の歴史や文化、そういうものを大事にしなごら、その中でどうやって生き続けていくのか、独自の積み上げてきた伝統といひますか、あるいはその力といひますか、そういうものを基盤にしなごら、さらに発展を図っていくところ、今、先生が最も力を入れたいといひこと、もう少しこいう取り組みが必要じゃないか、いろんなお考えがあたりだと思ひうのです、上手くいひっている部分もあれば、そうでないこともあるかしれません。抱負も含めてお話しただけなごらしょうか。

**新崎** ほくちが二度目に登場せざるを得なごらったことは、もう一度、大学が逆戻りを始めたからでもあるのです。そのことに危機感を感じた連中がほくちを引つ張り出しているみたいないごらがある。安良城さんが一年半から二年ぐらいい、そのとき副学長をやっていた永野さんも短期でしたけれど。その後、ほくちが二期、学長の任期三年ですけれど二期六年やるわけですよ。それでほくち自身もあまりそんな

ことばかりやっていくはなかったもので、最後は疲れてきてましたし、学長というのは連続二期しかできないという規程を作って、そこで終わりにしたわけです。

うちなんかの場合、基本的な給与条件などは事務職員は沖縄県並み、教員は国の研究職に準ずるという形をとりあえず目指してきたのですが、そこに回復して一年ではくは辞めたのです。結局、ある意味で安定したわけですよね。安定すると革新の意欲が薄れたり、いろいろとしんどい試みはやめて行く。こちらが最初に手掛けてきたつもりのも、どんどん他大学がやり始めますよね。単位互換なんていうのは一つのブームにもなっている。それから生涯教育ということ、土曜教養講座的なものも珍しくなくなってきた。そういう中で、いろいろ生き延びようというところで、改組転換ということになる。

時代の流れに合わせることは必要だが、ただこの時文部省がこう言っているからだけではしょうがない。そう言っているけれども、うちの大学の実情から言ったらどうだろうかということがおろそかになってきて、ある意味では新しい校舎を建てたり財政上一定改善されながら、いろんなものがマンネリ化し、そして、外的条件は少子化という八〇年代とは違った状況になってきています。ぼくなんかは、

そろそろ大学の教員を辞めて好きなことをやりたいと四、五年前から思っていたわけなんですけれど、もう一度行き詰まりかけてきたから、もう一度学長にされたというところがある。そういう意味で、ぼく自身準備ができてなかったというところがあります。前もそうでしたけれど、つまり、なってから考えざるをえないというところがあります。ぼくたちがこれまでやってきたことの延長線上でいえば、やはり、流れや趨勢をきちんと認識しながらも、自分たちができることとできないことをきちんと見極めておいて、沖縄大学がどういう役割を果たせるかということを考えていると思うのです。

抽象的にいえば、少なくとも沖縄地域で学生にとつても満足度の高い大学を作りたいということが、ぼくが今考えていることです。たとえば、大学の充実というときに、何を考えるかという大学院。大学院があるかないか、大学院大学かどうかで大学の格が決まる。しかし沖縄大学なんかの規模で大学院を持つのが正しいか。ぼくはあまり正しくないと思う。今、いろんな大学で無理して大学院を作っているけれども、その結果何が生じているかというと、ぼくの目から見ても、ぼくの知り得る範囲では、特に小さい大学では、学部の教育が手抜きになっている。教員もオー

バーワーク。そして、学部の授業料で大学院を支えている。大学の形式的な格を維持するために大学院を作っているようなところはないだろうか。確かに今の大学院は、社会人が増えていて、社会人の再教育という意味では一定の役割を果たしつつあると思います。ですから、財政的に余裕があれば、特色のある大学院を作るようなことはできると思っています。しかし、今の地方の小規模大学のあり方としては、ぼくなんかは、学部教育の機関に徹するべきだと思っっているのです。

もちろん、教育の基礎には研究が必要ですから、一方では、科研費の応募率を高めろといっているのです。これは貧乏な大学で、わずかな研究費をむしりあわないで、積極的に科研費申請などの努力をするべきである。それがどの程度公明正大に選考されているかどうかは別にしても、学生の授業料を当てにして自分の研究費を確保するのではなく、研究費は科研費をはじめ、いろいろなものがありますね、そういうのを獲得する。それを大学としてもバックアップするような情報を提供するというようなことをやりながら、研究費なんかを学費にあまり依存しないで確保するような方法を考えつつ、基本的には学費は学生に還元できるような大学経営の姿勢が必要だと思っっているのです。

ですから、むしろ大学院を作るよりは、どこかの大学院に入れる。そういう時に、単位互換協定を結んでいる大学が役立つかもしれない。これは年内にはやりたいと思っっているのですが、互換協定を結んでいる大学の学長会議をやってみたいと思っっているのです。

単位互換というのが、今、ある意味で流行になっていますが、ぼくたちは、必死になって考えたつもりなんですけどね。沖縄文化を、沖縄育ちの学生に相対化させるという意味があるとか……。それを活用している学生の中には、例えば、栃木県の学生が、沖縄大学に入って、札幌大学に行ったりしている。意識的にやっているのですよ、彼は。大学に入る前からそういうことを考えている。そういう学生も出てくるわけです。八〇年代の前半の段階で、本土の多くの大学が沖縄に学生募集にやってきていた。沖縄から、東京や大阪、福岡で試験会場を持って学生を募集していたのは、沖縄大学だけなんです。そういう中から、おもしろい学生が来ているのです。例えば、本土の高校でうちに複数受験したりしているのは、自由の森学園などいくつかあるのです。そういうところでは沖縄大学は存在感があるのでしょうか。

だから、そういう大学にしたいわけで、研究者を養成す



るような力は沖縄大学にはちよつとない。しかし、そこから出て行くのに、例えば奨学金を与えてどこかの大学院に入れる。これだけの大学と提携していますから、伝統的な研究水準の高い大学院を持っている大学もある。その大学院も活用させてもらえばいいじゃないか、自分の大学にみんなが無理して大学院を持つことはさらさら必要ない。

——今、教育機関に徹するべきじゃないかとおっしゃったことは、そういう力を学生が身につければ、例えば、研究の道に進んでいきたいという場合には、自分のところに持つていなくても、他のところに大学院があるわけですから、そちらに進学をして、力をつけてそしてまた戻ってきてもいいし、他のところに行ってもいいという流れを先生はお考えになっていることですね。

教育機関に徹するというになると、力がある程度のところまで考えてしまつて、主力は大学院ではないか、そういう言い方が結構ありますね。教育機関に徹すると、その意味がなくなるといふことを、あまり議論されずにもういいんだと、もう研究を放棄したんだという捉え方をするメンバーも結構いるわけです。そこをどう打ち破つていくかということが、大事なんですね。

新崎 やはり、研究と教育というのは非常に難しいですね。

第三者評価がなんだかんだといったつて、みんな研究業績が評価基準になりますからね。それから、大学の教員の採用だつて結局は教育面で見るとは、研究面だけで見がちですね。もちろん大学教育を維持していくためには、教員は研究者である必要があると思いますが、やはり矛盾していると思います。ぼくなんかは、やはり研究者としての側面は外と勝負することによつて、さつきの科研費と同じですけれど、身につけるべきだし、教育機関に徹するとして、この中から研究者が出てこないという話ではなくて、例えば、うちから早稲田の大学院に入る学生もいるわけですから。それはそれで努力してそういう大学に入らなければならないのですから、むこうに採られちゃつたという人は誰もいないわけです。彼らがどこをどう回つて、沖縄大学に来るかもしれない、来ないかもしれない、それはどつちでもいいです。彼らの選択ですから。

しかし、そうやってきめ細かい指導をする学部教育がやはり学生の満足度を高めるといふことだと思ひます。そして、学生の要求は多様でしょうから、へたに大学院を作つたりしてそちらにエネルギーを取られるよりは、むしろそうやつて、大学間の協定を活用しながら、今はまだ単位互換の協定だけなんですけれども、大学院に送るような協定

も考えている。また、ぼくが考えているのはこういうことですね。沖縄大学に入ったって、沖縄大学を卒業する必要はないと思う。沖縄大学に入って、京都精華大学を卒業してもいいじゃないか。もっと自由編入制というようなものがあったでもいいじゃないか。大学の再編・統合とかそういうことはやらないで、自分たちの大学の個性を生かしながら、しかし、提携を強化して比較的考え方の近いところとか、いろいろと今までの経緯でつながっているところ、こういうところが提携を強化しながら相互に、今は単位互換だけでも学生の籍まで移っちゃっても別にかまわないし、どこかの大学院に行くことがあってもいいし、それはおそらく片方の利益ではないし、双方にとつての利益です。そしたら現に偏差値やランクが違ふところや、違わないところが提携しても、双方に利益はあるのではないかなあというふうな、そんな考え方ですね。

——大学の弱さといった方がいいのでしょうか、一大学主義みたいなものが非常に強いんですね。先生のお話をお聞きしていて、先生のそういう発想というのは、どういうところから出てくるのだらうかというのが大変興味深いところです。それは一般に大学主義をとらずに、いろんなところと提携しながら、だけでも自分のところの大学はこうい

う個性を持ちながらということをやっていったらいいじゃないかという、なかなかそうなりきらないですね。

新崎 それは、もしかするとぼくが、そもそも大学教員になろうと思っていなかったことと関係があるかもしれない。ぼくのテーマは沖縄の問題であるというのが先にあるわけです。当時は感情的に訴えるとか、そういうことがたくさんあって、それは沖縄から来ている訴えればいけないわけですけれども、それをきちんと体系化し科学的に分析する必要があった。それがぼくの役割だと思っていた。それが多少研究という形になったとすれば、それは結果としてあるわけです。

ぼくは大学を出て、大学院へ行つて、大学の教員になつてということをもそもも考えたことはない。中野先生にも、「ぼくの仕事を手伝え、ただし、君の給料を払うのは無理だから、どつか飯は他で食わないか」というところから始まつているわけですから、「じゃあ、それでやりましょう」と。もともとそういう二足のわらじ、三足のわらじでやってきているわけですから、大学という殻とか枠の中で考えない。「開かれた大学」なんていうのは、今はもうどこでも使われるようになっていきますけれども、大学として固まらないでやるのはどうすればいいのか。細かいことをいえ

ば、助教授・教授という問題でも、非常に教育熱心な先生方というのはいらっしゃいますよね。必ずしもそういう人たちが論文を書くということにもならない場合もあるし、また、分野によって、書きやすい分野とそうでない分野というのがありますよね。それが今、一律に論文の点数だけで評価されるのも、どこかで壊せないかなあとぼくは思うのだけれども。そうしないとおそらく大学は生き延びられないのではないか。ぼくは別に、教育機関というときに、大学をいくつかにクラス分けしてあるいはランクをつけて、おれのところはこれでいいよといっているつもりは全然ないのです。もっと違う次元の多様性というのを作り出していききたい。

——関連するのですが、沖縄の学生が最高に満足する大学というのがテーマで、宇井さんの話では、これは沖縄だけの問題ではないのですけれど、解答がはつきりしているような教育を受けてきた若者が、世の中は変わらんという、そういう刷り込みをされてきている。沖縄でも目立つのかもしれないけれども、その中で問題解決型学習のようなものをやるとかね。答えは一つというようなものではなくて、新しい問題に対して、今、先生がおっしゃったようなダイナミックな考え方を学んでいくような力と、それをつけた

学生自身の満足と、それが大学の教育、授業だと思うのです。そういうのを作りたいたいというお話になっていったのだけれども、その問題については大学の七十一人の先生方の意識というか、努力はどんなふうですか。それがこれらどんなふうに関心していくのかなあ。結構その結果も問題ですが、そこらへんの感触をお聞きしたいのです。

新崎 感触といわれてもわからないですね。かつての教養ゼミが、今、宇井さんのいう問題発見演習ということになってきているのですね。それを看板を塗り替えただけでなく、本当にそうなっているかということは、担当する人間でも変わってきますし、七十人、どの大学でも同じだと思えますけれど、七十人いたら、三十人そういうことを必死にやってくれる人間がいたら、だいたい変わるんじゃないでしょうかね。その三十人の同志を作れるか否かが、要でしょうね。あとは付和雷同ではないでしょうが、必死にやってくれる人間が必要だ。どうしても、十人や二十人は扶養家族だから、残念ながら。七十人が一致して一つの方に向かえば大変な力になると思いますけれど、それはもう望めないと思います。

——でも世の中はFDですとか、優秀な教員にはお金をあげるとかね。学長の好みの先生に百万とか何千万とあげる

とかね。それで研究もやれ、教育も頑張れと読まれた方が多いと思うのですけれど、そういう動きに対しては何か考えることはございますか。

**新崎** 学生にとって満足度が高いという以上は、学生の授業評価とかね。そういうのは、早急にやっていくつもりではおりますけれども、その取り扱い方とかね、それはやはり難しいでしょうね。評価の基準で何が出て来るのかわかりませんしね。

——北星学園大学の学長をなさっておられた土橋先生にインタビューする機会があったのですが、学生たちによる授業評価というのをオープンにすることを取り組んでいくことを伺いました。学生の授業評価から、教育活動を行っていく上で、どういう点が担当者として弱点があったのか、学生の指摘によってそこから学び取って、次の時に工夫をする。そういう使われ方があってもいいじゃないかというお話をされたのです。そういう意味でいくと、学生の授業評価というのは、使い方如何によってはとんでもないことになる。授業評価、あるいは大学全体の評価というような問題について、点数化をして何点だから駄目とか、そういう動きというのが主流の傾向になっていきますね。そのところを、いやそうじゃないんだということをどう取

り出していくのか。評価をどういうものとして捉え、あるいはどういうものとして活用するのかという教員間の意思統一が非常に大事になってくるのではないかとという気がするのです。そこで、先生のところで、いろいろやられる時に、おそらくこれまでのお話の流れからいくと、七十一名の方全員が「はい、よろしい」というわけにはいかないと思うのです。むしろ多様な意見があって、だけれども最終的には、取り組んでいこうかというふうになると一番いいと思うのですが、そういう意味では案外楽観的に考えておられるというふうな気がしたのですが、そうでもないですか。

**新崎** 楽観をしているつもりでもないのですがね。ただ、やれるところまでしかやれないのだし、しかし、やれるところまではきちっとやってみたいと思うし、それくらいのことですかね。だから、学生の授業評価みたいなのが、画的にアンケート的なことをやるのも必要だけれども、それは一定の参考資料にはなるかもしれないけれど、ぼくなんか今、頭の中にあるのは、単位にも何にもならないけれども、ぼく自身の大学論を話すと同時に、学生たちから「沖縄大学はそんなことを言っているけれども、実際とは違うじゃないか」という注文を聞くような授業をしてみた

ということです。無記名でアンケート式に○や×をつけて出てくるものとは違う声をきちんと集約して、そういうものとアンケート式のものをつき合わせて何かが見えてこないかなあということ、今、漠然と考えているのです。それは組織的に皆に図ったりしているわけではありませんけれども。それと単位互換協定を結んでいる大学の人たちとの交流をもっと密にして、われわれの気づかないところなどがどこかにあるんじゃないかということを相互に学びあながら。

——私の勤務する大学では、評議会の制度になっているのですが、規模も大きくて、三学部くらいあるのですが、先生のところではまだ全学教授会でしょうか。

新崎 全学教員会議が骨抜きになりかかっていたのをもう一度、この四月からきちんと位置づけ直したところですよ。一応二学部あるから、大学協議会という名前で、全学教員会議の権限はだいたいそちらに委任するという形で処理するという形ができたかかっていた。教授会でだいたい議論があったけれど、文部省はそう言っているという話で。だけど、全学教員会議といっても七十名ですからね。二百も三百もになって、議論が成立しないという状況になれば仕方がないと思いますけれども、うちくらいの規模だったら、直接

民主主義的運営ができるんじゃないかと思うのですけれどもね。ほくはもっとそれを超えて、全学教員会議みたいなのを最高議決機関にすべきだと思っている。学則にはまだ位置づけられてませんが、これは八〇年代にも年に一回必ずやったのですけれどもね。今年もとりあえずは一回だけ復活しました。うちは学長選挙の一票は職員も持っているのです。それだったら情報もみんな共有化されるべきじゃないか。組織的意思決定にも参加すべきではないか。教職員全部入れて百二十くらいですかね。ぎりぎりできそうな気がしているのです。やはり教員と事務職員の関係をどう上手く作っていくかということは、大学にとって非常に重要な問題なのです。ところがだんだんそういうのも、一種のセクシヨナリズムというか、そういうもので全部固まっていって、そういうのを壊していかないと、本当の組織の活性化はできないとほくは思う。ただ、そういうのがだんだん後退していくのは、学長とかそういう人たちが、面倒くさいわけです。少人数で意志決定ができれば楽だから。

### 「地域住民と大学の協働」の展望

——沖縄大学は、土曜教養講座や移動市民大学を含めて、

地域つまり沖繩の人たちから存在を認められ評価もされているところまで来ているわけですから、これまでも、これまで積み上げてきたことを踏まえ、これからさらに二十一世紀における地域と大学、地域住民と大学の関係、あるいは協働といえますか、どういう展望を持った方がいいのか。先生のこれまでのご経験も含めながら、率直なお考え、多くの大学人に対してこういうことだけは問題提起として投げかけたいということをお話しただきたいのですが。

新崎 先ほども言ったように、僕の中できちんと整理をしていないのですが、地域と大学の協働という場合も、あまり大学人ということを意識しないでやっていくべきではないかなあ。先ほどもちよつと言いましたけれども、そういう枠をできるだけはずしていくといえますか。

今度、来年に向けて「ISO14001認証取得」ということを目指しているのです。この問題というのは、環境問題、特に宇井さんなんかの分野と密接に結びつくのですけれど、今のところ「ISO14001」を大学でとっているのは、十大学くらいですかね。この前、うちの職員がその一つの京都精華へ行って、いろいろ勉強したりしていますけれど、そういうのをここに置いて、例えば、沖繩大学が存在する地域そのものにそういう問題を含めて環境問題

への広がりを作っていくといえましょうか、他でそういうことをやりたい時に、沖繩大学でその手伝いができるということとか、これは一例ですけれども、そういうことですね。多くの念頭にあるのは。

それから、もしかしたらとつぎに聞こえるかもしれないのですが、沖繩大学で八六年に土曜教養講座で、「沖繩戦と強制連行された韓国人軍夫」というシンポジウムを持ったことがあるのです。そのきっかけは何かという、当時の韓国は今のようにな民主化されてない、全斗煥政権の時代ですけれど、一般の人は自由に外国にも行けない状態だったのです。戦争中沖繩に強制連行されてきていた旧韓国人軍夫が、「太平洋同志会」という名前の戦友会をつくって、日本軍に処刑されたり犠牲になった人たちの魂を自分たちのふるさとに呼び返して、慰霊碑を建てたいと四十年思っていたのです。それが朝鮮戦争があり、日韓関係の問題もあり、外に出るのが難しい。

そういう時に、外から招待すれば出られるというのです。彼らは招魂祭をやりたい。魂を招きたい。しかし沖繩大学は招魂祭を主催するわけにはいかなから、土曜教養講座の講師として彼らを迎えたいのです。そして、ぼくなんか中心となって、地域に絆を抜けてその人たちを迎え入れる

実行委員会を作ったのです。このことがきっかけになって沖縄戦の問題が沖縄だけの問題ではなくて、もっと広がりを持つていて、もっと目を向けなければいけない人たちの存在があったということを沖縄社会が認識し始めるのです。

地域との協働ということでは、これは地域社会の戦争に対する認識を深めていく上で、大学という立場なり、学長という立場なりを活用しながら、ほくは一定の役割を果たしたのではないかと思っっているのです。そういうことも大学だからできることがある。他の営利企業ではそういうことはできない。新聞社だったらできるかもしれないけれど。だから、大学の役割を考えると、大学というのは教育機関ですから、教育に徹するとはほくは言っっているわけです。それから、地域の特に本土の大学に出て行けない経済的な立場とか、受験情報の乏しい状況にある学生を受け入れて、どう教育していくかというのが基本にはありますけれども、そこにどまらないうのが基本にはありますけれども、それから、これも八〇年代前半から十年間ほど高文研という東京の出版社と提携して、共催で、基地・戦跡を知る沖縄セミナーをやった。これも、大学という立場を使ってやった。これには高校の先生も参加しているわけですから、

学生募集に役に立っていないとはいえないのですが、やはり、これが沖縄という地域に対する認識を、外側の社会に広げているはずだと思っのです。沖縄の問題というのは政治問題が中心で、主として基地問題がクローズアップされ、新聞なんかはその時その時の問題を、一時的には取り上げるけれども、そういう広がりのある知識を実感的には与えきれない場合があるのです。ところが、大学という場で繰り返し返しておくことによって、その何分の一かの歩留まりで、沖縄認識が例えば日本の社会に広がるということも、沖縄という地域に役に立っていることだと、ほくは思っっているのです。そういうことを公式的に、これでなければならぬという枠の中ではなくて、思いついたらISOから戦争の問題まで、大学の場でだとやりやすいことを、どんとんと地域の中でやっていく。それが必要なんではないですかね。それが大学にとっても役に立っし、おそらく大学が存在している地域社会にとっても役に立っ。

——先生のおっしゃっているのは、沖縄に沖縄大学があるのは紛れもない事実なんですけれども、そこに根付きながらも同時に、その地域というののもっと広いのですよね。なおかつ立地している沖縄の地域では、またそれを戻していくというような、循環といえますか、そういう意味での

地域認識というのが非常に明確におありだなと思うので  
す。

今、お話をうかがって、改めて「地域と大学」の関わり  
方について考え直さなくてはいけないかなと思います。

新崎 ぼくなんかは、なんか考えがあつて、そこから何か  
を生み出してきているというよりは、やっていって後から  
理論化しているようなところがあるから、理屈は後からつ  
いてきているというところがありますからね。おれがやつ  
たのはどういう意味があるのか、と考えてみたら、こうい  
う意味があつたとか。例えば、沖縄で初めて本土に逆上陸  
して学生募集をやった意味は何か、とかね。それは学生を  
集めるためにやったのでしようという、それきりの話な  
んです。

ただ、ぼくたちがそれをやる場合に、それまでに来てい  
る本土の学生にいろいろ聞いたのです。なぜお前、わざわざ  
さ沖大を選んで来ているのかと。誇大宣伝をやつて、学生



は来たけれども、みすばらしい校舎を見て「これは何だ」  
ということになっては困るわけですから。そしたらやはり  
いろいろなのがいますよ。「雪が降らないところに行つて  
みたかった」とか。あるいは「沖縄だったら、年がら年中、  
マリンスポーツをできそうだったから」。ところが、そう  
やって来るでしょ。来て、彼らは別にマリンスポーツにと  
どまつてないのですよ。やはり十人のうち三人くらいは沖  
縄の社会を何らかの形で見て帰つて、それが本土(ヤマト)  
社会と沖縄をつなぐ種をまいたことになっているのです。  
それならそれを積極的にやろうじゃないか。単位互換だつ  
てそうですね。はじめは派遣学生制度として、沖縄の学生  
に外から沖縄を見せて、沖縄を相対化させるということだ  
つたけれども、それにのつてくれて、「こっちから沖縄と  
いう日本の中で最も変わった地域に行つて、学生を学ばせ  
よう」という人たちが来て、相互交流になつて、それは広  
くいえば、沖縄という地域にも役に立っているのです。向  
こうの学生が来ることによって。  
そういうことでやっているの、後からいろんな実績を  
拾い合せている。これが大学と地域の協働ですよと言え  
ばいい。地域との協働ということを振りかざして、何があ  
るかといつてもなかなか出てこないのではないのか。



——新崎先生が考えておられるような、そういう自由なことができないような大学でないといけないのだけれどやらせてくれない。しぼる、コントロールする、つまらないことをやらせない。そういうのが九〇年代になってやたら増えてきた。予備校か高校みたいに、管理主義の高校みたいになつて、学生も縛り付けて。

**新崎** 大学の場合には、よかれ悪しかれ学長というのは、とりあえずは選挙みたいなのがありますよね。それが非常に形式的なものであったり、何か変な派閥争いという側面も確かにあるのだけれども、とりあえず会社の社長みたいな形でほんと来るわけではないところを何か利用して、各自がやらなければいけないのではないのでしょうか。僕もいろいろ考えて、最後のご奉公だというように思っていますけれども、やはり、ぼくの人生の半分くらい沖繩大学にかけちゃったから。沖繩大学に行く時には、こんなに長いとは全然思つてなかったけれども。

——先生の年代、あまり歳のことは関係ないと思うのですが、しかし、どうも見てみると、一九三〇年代にお生まれの先生方というのは、腰が座つてるといふような感じがしますが、どうでしょうか。

**新崎** それはわからないけれど、ぼくたちは、戦前の教育

も多少は受けてきているし、それがひっくり返っていく様子も知つているというのもあるでしょう。ぼくなんかは繰り返しになりますけれども、大学の教員になるつもりがあつてやつてゐるわけではないし、ある意味では社会運動の一貫みたいなものだ。そういうことで言つてしまえば、たまたまそれが大学という場になつてしまつたというくらいのことです。

——先生の今日の大学のあり方に対する問題提起というのは、いろいろとお話の中であつたわけですが、今、だんだん大学に身を置いている教員を見れば、腰が引けてきているのではないかと気がするのです。やはり、しんどいけれども、厳しいけれども、力を合わせながら、多様な意見の違いは違いとして、お互い認め合った上で、大学をこういうふうにしていこうということを大切にしていきたいと思ひます。厳しい日程の中、しかも、台風がうろついている中、わざわざ起こしていただきまして有り難うございました。お話をうかがつていて、われわれ元気をいただいた感じがします。どうも有り難うございました。

(二〇〇一年九月八日 名古屋空港にて)

構成 伊藤彰男